

二〇二三年度

沖縄大学 一般選抜（前期）

「国語」

国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

無限に流れる時間を区切ることを人間が考えはじめるためには、自然現象としての夜と昼、夏と冬などの体験がその基礎となっていることだろう。特に太陽や月の運行は、時を測るための大切な①シヒョウであつたことと思われる。日の出と共に起きて働き、日暮れには家に帰って休む。このような生活にとつて、時間の流れや、時間の区切りは自然のリズムと密接に関連するものであつただろう。このような状態のときに、人間の経験する「時間」は、彼の体感や感情と結びついたものとして、人格の深部にまでかかわりをもつものであつたろう。

幼児の時間体験を観察してみると、なかなかおもしろいことが認められる。幼稚園にいる子どもたちは、どのように「時間を区切つて」いるのだろうか。幼稚園の庭の片すみで、かたつむりをみつめて、それが殻からからだを出し、目を出して動きはじめるのを、いっしょうけんめいに見つめている子、この子はどんな時間を経験しているのだろうか。かたつむりを見つめている間の「時間の区切り」は、いったいどうなっているのだろうか。

幼稚園が九時に始まるという場合、大人が考えるのと同じように、「九時に間に合うように」登園してくる園児が何人いるだろう。おおたの子どもは、お母さんが行きなさいというままに、あるいは兄妹や友人たちにさそわれるままに、登園して来るのではないだろうか。だからといって、彼らは「時間の②カンネンがない」とか、幼稚園はいつ行つてもかまわないと思つていているというのでもない。彼らは彼らなりに、「おくれてはいけない」ことも知つていのである。

幼児たちは、さきにのべたように大人のもつ時計によつて区切られた時間とは異なる時間を生きているようだ。「きのう」とか「あした」とかの意味も、はつきりとしていない子もある。「また、あしたにしようね」などと言つている子も、それは厳密にあしたということではなく、「近い将来」を意味していることも多い。

【 A 】 何かに熱中していたが、何かで中断しなければならなくなったとき、「また、あしたにしよう」と言うのは、このことを言うことによつて、中断することを自らに納得させようとする意味あいと言つている子もある。この場合の「あした」は、二十四時間の経過後に存在する時期などではなく、③ダンネンしなければならぬという気持と、何か希望を残しておきたいような気持の④交錯した現在の状況をのべている表現なのである。

道くさをしたために叱られる幼児たちが、悪かつたという気持をあらわしながら、何とも納得のいきかねる表情をしていることがよくある。彼らも叱られながら、「おくれってしまった」「おそくなつて悪かつた」ということはよくわかつているのである。しかし、なぜおそくなつたのだろう。「ぼくは何もしてなかつたのに」「ちよつとだけ、おたまじゃくしを見てただけなのに」と思つていのである。たしかに子どもたちは「ちよつとだけ」何かをしていたのである。しかし、残念なことに、それは大人のもつている時計では、「一時間」も道くさを食つていたことになるのだ。

おたまじやくしを見ていた子どもが、一時間を「ちょっとの間」と思ったように、われわれ大人でも、同じ一時間を、長く感じたり短く感じたりする。恋人と話し合っていると、すぐに時間がたってしまったて別れのときがくるのに、嫌な先生の説教は少しの間でも⑤随分長く感じられる。時計の上では一時間であっても、経験するものにとっては、その一時間の厚みが異なるように感じられるのである。もちろん、時間そのものには厚みなどがあるはずがないから、あくまで、それを経験するものの主観として、厚みが生じてくるのだ。

何かひとつのことに熱中していると、時間が早くたっていくことは誰もが知っていることである。といっても、何かひとつのことをしていると、必ず充実した時間を過ごしたことになるとは限らない。

【 B 】【 テレビのドラマなどを見ると、必ずしも見ていないと、ついひきこまれて終わりまで見てしまう。終わってみるといつの間にか一時間たってしまったている。しかし、このあとでは充実感よりも⑥空虚な感じを味わうことだっている。時間は早くたつたと感じられたが、その厚みの方はうすく感じられるのである。

あるいは、ひとつのことをしていても時間が長く感じられるときもある。その一番⑦テンケイ的な場合は、(1)「待っている」時間である。誰かが来るのを待っているとき、われわれはなかなか他のことができない。そわそわしながら待つ、しかもその間は随分と長く感じられるのである。「待つ」ということだけをしているのだが、時間を長く感じてしまう。

これらのことを考えると、自分のしていることに、その主体性がどのように関係しているかにしたがって、時間の厚みが異なってくるらしいと思われる。「待つ」ことは、受動的なことである。その人がいつ来るかは、その人の行動にまかされているわけで、待っている方としては、ただそれにしたがって待つより仕方がないのである。これはテレビの場合でも同様である。テレビを見終わって充実感のない場合は、私たちがテレビを見たのではなく、テレビが私たちをひきこんでしまったのである。私たちは受動的に見ていたのだ。

子どもがテレビを見すぎることはよく問題になる。【 C 】【 テレビを見すぎることは、子どもが「与えられた映像」を受動的に楽しむことによって、主体的な時間をもたなくなる点に危険性が存在している。しかし、テレビの主体的な見方だっているはずである。⑧カイジユウにしろ、チャンバラにしろ、子どもにとっては必ず経験しなければならない世界なのである。だから、それを見たいときには「主体的」に十分に見させることがいいのではないか。主体的に十分体験したものは、常に早く「卒業」する。

ところが、いろいろと親の⑨カイニユウがあつて主体的にテレビを見ていない子どもは、なかなか卒業できない。いつも受動的にテレビを見て過ごしてしまう、時間は過ぎ去っていく、テレビはうつっている。主体はテレビや時間の方であつて、子どもは受身の立場に立ってしまったているのだ。ついでにつけ加えておくと、主体的にテレビを見させるということは、子どもの「見たいままに放任することではない。放任の中から主体性は出てこない。

テレビは見たいが勉強はどうするのか、父親は野球が見たいが子どもは漫画が見たい、これをどう解決するか。食事中にテレビを見ないのはわが家のおきてである。ところが、食事時間にどうしても見たい番組ができた。これをどうするか。

これらの葛藤と対決していくことによってこそ主体性が得られる。(2) 対決を通じて獲得した時間、それは主体性の関与するものとして、「厚み」をもった時間の体験となる。

ここに充実した時間体験の問題点が生じてくる。【 D 】、子どもに充実した時間を与えてやるうと思ひすぎるあまり、一時間のうちに「このこともやらせよう」「あのことも教えてやるう」と思つて、親や教師が熱心になればなるほど、子どもの主体性を奪つてしまうことになって、子どもはいろいろなことをしていながら、それは厚みのない時間体験になりさがつてしまう。

私たちが、時計で測る「時間」にとらわれ、「能率」ということにこだわり始めると、「能率的教育法」という美名のもとに、子どもたちの主体的な時間を奪つてしまう危険性が生じてくるのである。

人間社会というものはむずかしいものである。本来ならば各人が所有して取り合いをしなくてすむ「時間」も、人間関係ということが存在してくると、ややこしくなってくる。テレビのチャネルの奪い合いのように、われわれは時間の奪い合いをしなくてはならない時だつてある。このように考え始めると、幼児教育にたずさわるものはこわくさえなってくる。子どものことを考えて、何かしてやるつもりでいながら、結局は彼らの時間を奪うようなことをしていないだろうか。

限られた時間を奪い合うことを⑩サけるためには、時間を共有することを考えねばならない。ありがたいことに、それを共有することによって、分け前が少なくなることはない。

時間は無限である。しかし、「私の時間」は限られている。人間一人一人のもち時間は、長短はあるにしろ無限ではない。時間のことを考えると、私たちは人の「いのち」のことを考えざるを得ない。幼稚園に來ている一人一人の子が、その「いのち」をもっているように、子どもたちはその個人の時間をもち、それを共有する場として、幼稚園にやつて来る。このように考えると、幼稚園の子どもたちとすこすこ一瞬一瞬が、かけがえのない大切なものとして感じられてくるのである。

【 E 】、前にものべたように、こちらが押しつけがましいことをすると、かえつて子どもは主体的な時間をとつてしまうことになる。個々の子どもの「いのち」の流れはその個性にしたがつているものだ。私たちはこちらからおしつけるよりも、その子どもたちのいのちがどのように流れるかを、見守つてみてはどうだろうか。入園した当時は集団のなかになかなかはいれず、いつも庭のはしの方に立っていた子が、日がたつにつれてだんだんと元氣になつてくる。そして、友だちがブランコをする下に立つて眺めていたりするようになる。友だちの運動を楽しそうに、時にはうらやましそうに見ていた子が、ある日、とうとうブランコに乗つてみる。その時の彼の顔の輝きはどんなものだろう。この子が思い切つてブランコの⑪綱にさわつてみた「とき」、それは何と重みをもつた「とき」であろうか。時間にも厚みがあるようだということはさきにのべた。ここに示した「とき」はそのような厚みの最高に⑫凝集されたものであり、限らない充実感をもっている。ブランコのひとふりひとふりに、その子は自分の「いのち」のリズムを感じたに違いない。

このような意味のある「とき」の体験は、教師がそのつもりになつてみれば、幼稚園のあちこちで生じていることが認められるだろう。「先生、こんなところに毛虫がいたよ」と叫ぶ子ども、生まれてはじめて友だちの玩具をひったくつた子ども、珍しい石を発見した子ども、その子たちの経験の一瞬に「いのち」の躍動がこめられている。そんなときの先生の態度や一言が、どれほど彼らに生きていることの意味の体験を深くせしめることだろう。大切な「とき」は信頼し得る人と共有することによって、意味が倍加されるものだ。

子どもたちのこのような主体的な「とき」の体験を多くするためには、(3) 私たち大人は、できるだけ不要な干渉をせずに、「とき」の熟するのを待たねばならない。気の弱い子が自らブランコに手をふれるまでには、それ相応の⑬時日を必要とする。「待つ」ということはつらいことだとさきにのべた。

しかしこの場合、私たちは「待つ」この意味を知り、主体的に待つことができるのだ。その間に⑭無為に時が流れ、私たちは受動的に待っているのではない。何もないように見えながら、その裏で時が熟していくのを私たちは知っているのである。よき教師は、退屈せずに主体的に「待つ」ことを知っている。そして、その「とき」がきたとき、私たちはそれを子どもたちと共有し、意味を確かめ、経験を共にすることができる。このときに感じられる「存在感」は、何時何分にどこにいたというような意味での存在を、はるかに超えたものとなっているはずである。

(河合隼雄「子どもの『時間』体験」『河合隼雄著作集第7巻 子どもと教育』一九九五年 岩波書店 所収。ただし、作問にあたり一部改変した。)

問一 _____ 傍線部①から⑭の漢字にはひらがなで読みをつけ、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 【 A 】から 【 E 】にあてはまるものを次のなかから選んで入れなさい。

【 たとえば たしかに さりとて つまり あるいは 】

問三 (1) 『待っている』時間』とあるが、その特徴として筆者が指摘していることとして、次の(a)～(e)において、適切なものには「○」、適切でないものには「×」をつけなさい。

- (a) 充実感よりも空虚な感じを味わうものだ
- (b) それはふつう受動的なことである
- (c) その間なかなか他のことができない
- (d) 子どもにとって必ず経験しなければならない
- (e) その間は随分と長く感じられるものだ

問四 (2) 「対決を通じて獲得した時間、それは主体性の関与するものとして、『厚み』をもった時間の体験となる。」とあるが、そのことについて、文章中の言葉を用いて五〇字程度で説明しなさい。

問五 (3) 「私たち大人は、できるだけ不要な干渉をせずに、『とき』の熟するのを待たねばならない。」とあるが、そのことについて、文章中の言葉を用いて一〇〇字程度で説明しなさい。

問六 この文章についてのあなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。そのさい、『いのち』の躍動、「主体的に待つ」の二つの語句を用いること。